ふるさとを語ろう

九州・山口人国記

教師の父から「おい、少年」

国学院大理事長　坂口吉一さん

熊本市から南西方面に20キロ程度離れた甲佐町で生まれ育ちました。山あり川あり田んぼあり。まさに「田舎」という表現がぴったりで、農業が盛んな土地柄です。

まちの標語は「花と緑と鮎の町」。実家近くに川があり、その約1・5キロ上流には、魚を獲るための「やな場」がありました。東屋が設けられ、シーズンになるとおいしい鮎料理が提供されます。町の料理屋での甘露煮はお土産用としても有名です。父も鮎釣りが好きで、夏休みには、よく弁当を届けに行った思い出があります。現在は天然の鮎が大変少なく、なかなか釣れないそうです。

幼い頃は集落単位で遊んでいました。年齢は上から下まで10歳ほど離れていましたが、ガキ大将の号令の下、いつもつるんでいましたね。川では年長者から泳ぎを教わるなど貴重な体験をしました。

自分で言うのも何ですが、運動神経が抜群に良かった。特に足は速かったですね。町内に5つの小学校があったのですが、学校対抗リレーでは5年生のときに6年生に混じって走っていました。中学も高校も陸上部。高校のときは勉強も部活も中途半端でしたが、走り幅跳びで熊本県の第4位に入ったことがあります。

運動が得意だったのは、保健体育の教師だった父のDNAを受け継いだからでしょうか。父は生徒から、慕われていました。正月には卒業生がよく訪れてきましたし、相当数の仲人も務めました。

高校に進学するときは、熊本市内の学校も考えたのですが、甲佐高校に入学しました。実は、父の教師生活のうち、約4分の3の期間が甲佐高勤務でした。名物教師として知られ、私の在学中も勤めていました。思春期だったので恥ずかしかったですね。当然ながら全校の生徒が、父との関係を知っており、「生徒会長なんかに選出されたらかなわない」と逃げる手段を考えたものです。

1～2年は授業での接点がなかったのですが、3年の時にとうとう〝対面〟しました。そのときに、何と言われたと思います？

「おい少年」ですよ。走り高跳びの授業で、私が陸上部だったため「少年。まずやってみろ」といった感じです（笑い）。

東京の大学に進学したいという思いで一杯でした。体育大学出身の父も東京で学生生活を送ったので「色々な地域の出身者と友人になり、見聞を広めろ」と、賛成してくれました。

国学院大学に入学するとワンダーフォーゲル部に勧誘され入部しました。とても厳しく、合宿では日本各地の野山を歩き回りました。山陰地方で合宿を行った後、私の実家に寄って十数人が宿泊したこともあります。

故郷とは現在も密接なつながりがあります。約200人のメンバーで構成される「東京甲佐会」という組織があり、散策会やゴルフコンペ、夏冬の懇親会などを開催しています。年1回の総会は、甲佐町の町長、議長、教育長ら街から約10人の人が参加されます。その総会は本学の有栖川宮記念ホールで開催しています。

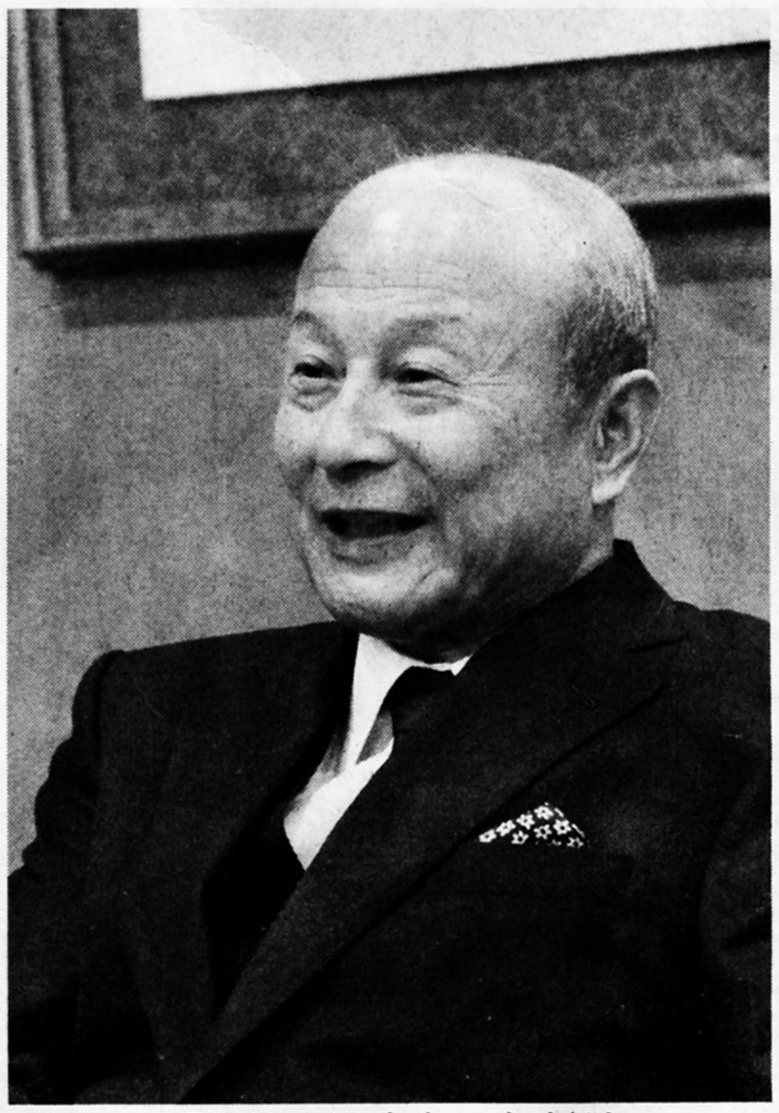
地元では毎年12月に陸連公認の「甲佐10マイル（＝16・093キロ）ロードレース」が行われています。国学院大の陸上競技部の学生も出場。スタート・ゴール地点から徒歩5分の場所に私の実家があります。本学の学生は、来年1月に96歳になる母が住む実家で、着替える慣わしなんですよ。

本学では地方出身者の学生を増やす方策の一つとして、奨学金制度や学生寮の充実も検討しています。しっかりとした目標を持った学生の入学を望んでいます。

（伊藤俊祐）

◇

次回は京セラ丸善システムインテグレーションの松木憲一社長が登場する予定です。



「故郷とは今もつながりがある」と語る坂口氏

さかぐち・よしかず　熊本県立甲佐高校、国学院大学政経学部卒。昭和41年に同大事務局入職。平成15年学校法人国学院大学常務理事。22年から同法人理事長。73歳。熊本県出身。